一貫性を持った世界の根源的な在り方

川津 茂生　　国際基督教大学教育研究所

論理の一貫性の限界を補完するには、一貫性を倫理的な次元へと拡大し、一貫性の一般理論を作成することが必要である。この考え方を敷衍すれば、論理の限界が、超越的他者からの包摂的関与によって、補完されるという推論も可能となる。また、外部からの包摂的関与が、元来、生命的関与であったと想定するなら、一貫性を持った世界は、生命的関与によって成立した可能性すら出てくる。その生命的関与へ応答することで、世界が生命的に変貌したとすれば、現生命は、超越的生命的関与が応答的に復元されたものだった可能性もあり得る。これらの推論は、一貫性の一般理論の考察から理性的に導出可能であって、それは、単なる文学的想像力を越えた形而上学的思考へと導いていく。

Keywords: 一貫性の一般理論, 論理と倫理, 包摂的関与, 対面(化)原理, 形而上学

論理の「それ自体性」

論理的な一貫性は、それ自体においては、必ずしも完結しない (ナーゲル&ニューマン, 1999)。その不完全性を補うためには、一貫性を、論理的な次元から倫理的な次元へと拡大する必要があるものと、推論できる (川津, 2018a)。

その推論の背景には、論理というものが、根本的に「それ自体性」、即ち、ある一つの世界というものの内部に留まっていること、への批判的考察があった。

一人称の意識の反省面における思考の無矛盾性を追求する論理は、対象化された三人称世界の現象を無矛盾に解析し説明しようとする欲求と共に、「それ自体性」に留まっているという点で、限定的なものに過ぎない。

どちらの企ても、不完全性という弱点を持つが、それは、無矛盾性の追求が、単一の論理的世界の内部での追求であることによるものと思われる。

一貫性の領野を論理的な世界から倫理的な世界へと拡大することが必要なのである。

一貫性の一般理論の必要性

一貫性は、論理的世界では、不完全であり、真の一貫性の実現のためには、論理から倫理へと場面を拡大し、一般化された理論を作成しなくてはならない。

倫理というものは、他者と自己との関係性であって、単一の論理的世界の内部に閉じられてはいない。論理的追求が、単一の論理的世界で、行き詰ったとしても、そこに生じる困難や困惑を、他なるものが受容して、いわば「超論理的」に承認することが生じれば、そこにおいて、論理的な破綻は、いわば倫理的に縫合されて行くことが可能となる。

一貫性の理論の一般化の必要性は、一貫性の領野が、そもそも論理的世界を基盤としていたのではなく、その原初的な故郷が、むしろ、他なるものとの関係性を根源的に持つ、倫理的世界であったことを暗示している。

他性、あるいは原理としての関係性

一貫性が、形式的論理によって貫徹できないのは、形式的論理に、他性ということが欠如していることによるのではないだろうか。他なるものを容認しない、論理的世界の「それ自体性」を克服するためには、他性の導入が必要である。

他性は、論理的解析を越えている。今、論理的な無矛盾性から始めて、他性をも、その無矛盾な世界の中で解析できると仮定してみる。たとえば、人工知性を二体作成し、それらの間に相互関係性を持たせたとする。しかし、その場合、他性や対他性なども、原理的には他性を含まない、単一の自体的な世界からの副次的構成に過ぎなくなる (川津, 2018b)。

しかし、論理的な一貫性が機能しない場所では、根本的に対他的な存在からの包摂的関与によってのみ、実際上の一貫性が実現するとするなら、それは、論理的自体的世界の外部を承認することに繋がる。そういった考察は、科学的思考を越えた、文学的想像力の世界に接近していく。

論理的行き止まりを補う、肯定的補完が、論理的世界の外部からの包摂的関与として与えられるなら、それは、もはや論理を越え、むしろ言語による受容的表現に接近する。

おそらく、言語は、チョムスキーが言うような、脳内の生物学的器官であるというよりも、むしろ、生命以前においてすら想定できる、根源的包摂的関与が、まったく他なるものからの、生命的で意思的な肯定的関与として、本質的に言語的出来事であったことに溯源するものだ、と言えるのではないだろうか。

根源的な出来事としての、原初的関係的包摂的関与性は、その在り方としては、元来言語的だったとするのが、適切ではないだろうか。

科学的思考と文学的想像力の接点

対他的な関係性による包摂的関与によってのみ、論理的一貫性の限界が縫合される、とするなら、その延長線上に、超越的包摂者が想定されたとしても、そのこと自体は、必ずしも反理性的とは言えない。

そのような推論は、関係性の他端における、生命的な実体的存在者を、必ずしも、前提としない。

原初に、自由で選択的で意志的な可能性を保持する他性が存在したと想定しても、進化による生命や知性の誕生の結果を、宇宙の始原にまで遡らせるといった、アナクロニズムにはならない。

一切の先入観を捨てて、一貫性が、論理的世界それ自体においては不完全で、その自体的な行き止まりを補完するためには、対他的な関与的受容が必要であることを、先ず、認めてみるのである。

外部の自由な他性が、補完的縫合をしなければ、自体的な論理的一貫性は、それとしては、いずれ止まることになる。

論理的世界は、総合的に見れば、外部からの包摂的関与がなければ、維持不可能だと思われるのである。

関係性の原理は形而上学へと誘う

理性的であることが、われわれを形而上学へ導く。世界の外部は、物理的世界を越えている。

本来の一貫性が論理を越えていて、むしろ、世界の外部における他性という、形而上学的な背景を必要とするなら、理性的に、それを拒む理由はない。

むしろ、問題は、根源的対他的関係性あるいは関与性という原理を想定せずに、本来的な一貫性の世界があり得るのかどうか、という一点に収斂する。

本来的な一貫性が、対他的で関係的な関与がなければ、維持できないとするなら、何らかの意味での超越的関与を、想定することが不可欠なのである。

それを拒否するなら、いかに一見形式的に一貫した論理によって、世界を説明したとしても、それは、結局、真に一貫した説明にはならない。

理性的な探求を貫徹しようとすれば、完全な一貫性が必要である。そのことが、原理的に、（対面 (化) 原理とも呼べる）原初的関係性を必要とするなら、それが、形而上学へと繋がっていたとしても、その道を辿る以外に、理性的な考察は出来ない。

形而上学的な世界は、単に想像力の世界ではなく、理性が、そうでなければ解決できない問題の解決の糸口として、そこへ導くのであって、それは、厳密な思考の結果なのである。

その道こそが、行き止まりに見える、科学的理性の閉包性に開放的扉を与え、理性に、自由な創造的真理を、開示していくのだと言える。

一貫性は「対面 (化) 原理」によってのみ確立する

論理の「それ自体性」ということが、もっとも原理的であると考えずに、対面的また対話的な関係性こそが、本来的な原理であることを、理性的に承認できないであろうか。

この点を承認することができれば、われわれの世界観また宇宙観は、知性の深い深呼吸によって、近代の対象化の方法による、冷たく孤立した「それ自体性」を、乗り越えて行くことができる。

具体的にどのようにして、それが可能となっているのかは、未だ、謎であるとはしても、ともかくも、根源的な関係性が在って、それによる超越的包摂的関与があるとしなければ、われわれの世界の論理的一貫性の破れが、真に肯定的な形で縫合されて行かないのではないかと、推論できるのである。

結論

超越的外部からの包摂的関与によって、不完全性を縫合された論理的世界は、外部からの、生命的関与によって、本来それ自体としては、生命的でなかったのにも関わらず、関与への応答的な反応が、次第に応答的生命性を保持するようにと、変貌していったのだと、考えることも可能である。

とすれば、無機的な論理的世界に、生命が進化によって出現したというよりも、原初的に生命的な関与が与えられていた世界において、関与に対する応答的反応の進化によって、生命が、復元的に誕生したということが、真相だったのかも知れないのである。

この世界に一貫性があるということが、本来的に生命的な事実として認定されるなら、生命が誕生する以前から、そもそも、世界というものが、根源的に生命的な関与の下でのみ成立していたということになるからである。

Appendix

最後に補足として、もし、物理学的思考に、根源的他者性の考察を接続するとすれば、あるいは、「観測者」ということを、関与的な超越的存在と関連させて行くことが、発展的な可能性をもたらすかもしれないと、指摘しておく。それは、「超越的観測者」が観測しつつ関与する、という事態を想定することでもある。

引用文献

川津茂生 (2018a). 物理的な一貫性と歴史的な一貫性の境界面としての意識,「注意と認知」研究会第 16 回合宿研究会, 名古屋

川津茂生 (2018b). 人称的実在の確実性, 日本心理学会第 82 回大会, 仙台国際センター

ナーゲル, E & ニューマン, J. R. 林一(訳) (1999). ゲーデルは何を証明したか: 数学から超数学へ, 白楊社